過去≠未来

アエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
過去≠未来

【Ｎコード】
Ｎ０７１８Ｑ

【作者名】
アエ

【あらすじ】
※連載というよりシリーズ物。お話自体はあまり繋がってません。
＊
創られた似非人間と気狂い少女の恋愛物語。
普通の恋愛じゃ物足りない方へ捧げます。

0から始まる

どうして覚えてないの、ねえ。

どうしてもなにも、なにを思い出せというのか。だって俺は生まれたばかり。姿こそ大人だけど、頭の中は空っぽなんだよ。
俺が唯一確認できたことって言ったら、人間と同じ形なのに人間じゃないことぐらいだ。俺を作ったという輝秀ってやつがそう言っていた。

人間で言う心臓の辺りに酷い痛みがした。じわじわとあふれ出してくる赤い液体。
人工的に埋め込まれた知識はそこそこある。この液体が人間の体の中で流れている血だってことも理解できたし。てか俺にも血が流れているんだ

でも、ここで倒れないのが人間との違いなのかな。

どうして、だなんて目を見開く少女。まあ会ってや否俺に包丁を突き刺してきた奴だ。
逆に俺が聞きたいよ。どうして俺は刺されたんだ。俺はこの子なんて知らないし、きっとこの子だって俺のこと知らない…

わけがなかったんだ。あーうん、ちょっとだけ思い出したような気がする。俺さ、前もこの子に殺されてるよ。
そこまでだった。どうして俺が殺されたのかとかこの子がどうとか

誰とかそういうのは全然思い出せない。
突き刺さったままの包丁を引き抜いてそのまま床に放り投げる。とりあえずこれからもよろしく、なのかな。
そう思って手を差し伸べるとすごい勢いで振り払われてしまった。
え、怖い。

…でさ、どうして俺はここにいるんだっけ。……あ、そうだ。
隣で苦笑している奴を見る。そうだ、俺はこいつに連れてこられたんだ。
これからは三人でここに住むって言われて家の中に招待されて、待ち構えていた少女にこれ。

「まあ、まだ序盤だし…」
「は？」
「しょうがない、か。大丈夫？刺されたところ痛くない？」

とりあえず俺を残して先へ先へと話しを進めるのはやめて欲しい。
ただえさえ真っ白なのに。
唖然としながら　まあ痛いかなぁ…　なんて曖昧な返事をする。するとそいつは青く手を光らせて…え、光らせて？

「傷を治せるんだ、生まれつき」
「へ、へえ…」
「ジッとしててね」

なにこいつ俺の知ってる人間じゃない。
これは俗に言う仙人とか能力者とかそういうもんなのか？分からない、分からなさ過ぎる。
ある程度痛みが治まったところで光は消えていった。

「はい、おしまい」
「ありがとう…えっと、」
「厩戸。宝龍厩戸です」

男とは思えないほど可愛い笑顔で手を差し伸べてきてくれた厩戸。
…え、男であってるんだよな！？
戸惑いながらも手を握ると嬉しそうに頬を緩めてよろしくねだなんて可愛いにも程がある。

いやまてまてまて、俺、俺さ、もしかして昔厩戸と、

「莢、」
「！」
「莢、久しぶり、莢」

どうしてどうして、なんでお前も覚えてるんだよ。
笑顔のままボロボロと泣き出した厩戸に、出掛かっていた記憶がすべてぶっ飛んだ。
どうして俺だけ思い出せないんだ。覚えていないんだ。なんで、なんで。

赤く塗りつぶせ！

ぐちゃり、ぐちゃり　だなんて音を立てながら腹部の突きたてた包丁を回すように動かす。

いくら動かしても鳴り止まない音にイライラしてくる。死んだくせに、死んだくせに。

もしかしたら死んでないんじゃないか、と一旦抜き出した包丁を両手で持ち直して勢い良く心臓の部分に振り落とした。

ぷちょ、と飛び散った血が私の顔を汚していく。と同時に鈍い咳きをしたこいつは大量に血を吐き出しやがった。ほら、生きてたじゃん。

そりゃ、そうだよね。だって、こいつは

「…なんか、痛いんだけど」

「そう、じゃあ死んで」

「あー…うん、死にそうなぐらい痛いな…」

「死にそうじゃダメなの、死んで」

「いやだって、まだ死ぬような痛みじゃない、し…」

本　当　に　こ　い　つ　は　。

非常に腹が立って、もう一度包丁を振り上げた。　その瞬時、莢は今まで見せたことのない顔を見せてきて、

首元を狙ったそれは、首を微かに掠って床に突き刺さった。　なに、いまのかお

「、…なんで、驚いてんの」

「いや…誰だって驚くと、おもう…けど」

「…し、ね」

やめてやめてやめてお前のそんな人間らしいところなんて見たくないの期待しちゃうじゃないどうせ貴方は人間じゃないくせに化け物のくせに、電子的ななにかのくせに！！

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね　と呪文のように呟く（このまま言葉の勢いで本当に死んでくれるんじゃないかってくらい大量に）私

に伸ばされる大きな手。

ピクリと反応してしまう自分こそ死んでしまえば良いと思う。だなんて目を見開きながら考えていると、ふいに頬を包み込まれた。

「…、泣くなって」

「なんのこと」

「うん、ごめんな、人間じゃなくて、ごめんな」

ごめん、だなんて。思ってもないくせに。

（死んじまえ、似非人間）

妄想逃避

之乃の　死ね　は　愛してる　なんだろ？

だなんて、どっかの似非人間さんが言っていた。
馬鹿だなぁ頭いかれてるなぁはやく死んじゃえば良いのに死んで悔い改めれば良いのにああでもこいつ死ねないのかかわいそうに死ねよ馬鹿
なんて思ったのは良い思い出。うん、死んじゃえば良いのに。

そんな似非人間さんは今日も今日とてパソコンでエッチな画像を掘り出してはなんやかんやでニート三昧。たまに見せてこようとしてくるからフライパンで頭かち割ってやろうとしたり。
まあこいつは人間じゃないからね、どこも雇い先がないだけでね。
ああ可哀想に、あはは可哀想に、あははは死ねばいいのに。
厩戸が養護施設で本格的に働くことになってからというものの、こいつと二人きりの時間が増えてしまった。
たいした会話とかはしないんだけど、なんかこいつが同じ空間にいるっていうだけで腹が立つ。その頭上に包丁を振りかざしてやりたいわ。噴水みたいに血がぴゅーって？うわーうざい。
だったら部屋に居れば良いって？そしたらそいつわざわざ部屋まで来て、お前がいないと寂しい　とか言ってくるんだよ。その顔がまたうざくてさ、人間じゃないくせにそんな、顔すんなって

之乃ちゃんは本当に莢くんが好きなんだね、

この前月架のところに遊びに言ったら、フランさんに言われてしまった。
否定はしなかった。そうだね、私は似非人間が好きだ。好き過ぎる自分を殺してしまいたくなるぐらい、好きだ。
でも、私よりあいつの方が私のことが好きなんじゃないかって、自惚れてみる。でも残念ながらそれは私の妄想でしかなく、真実は…
まあ、

「厩戸、なんだと思う」

「そうかな？」

「はぐらかそうとする厩戸嫌い」

「はいはい。紅茶飲む？」

「飲む」

今日は珍しく厩戸と二人きりだったので、ずっと溜め込んできたものを吐き出してみた。

莢は輝秀さんのところに行ったらしく、あの耳障りなパソコンのモーター音も聞こえてこない。
食卓用のテーブルを挟むように座っていた厩戸は、紅茶を淹れる為に席を立ち私の後ろにある食器棚からカップを出すついでに、私の頭を一撫でしていった。
なにかと歪んでいる私だが、厩戸にされる子供扱いは何故か幸せになれる。たぶん厩戸から放たれる、なにかそういったものもあるのかもしれないが。
莢なんかに子供扱いされた日には…たぶん、正気で居られない気がする。勿論悪い意味で。

「…厩戸が淹れてくれる紅茶好き」

「そう？ありがと。まあ、フランには負けちゃうけどね」

「うん…でも、厩戸の方が好き」

「そっか」

厩戸にだけは素直になれ、ているような気がする。寧ろ厩戸だから素直になりたい。
で莢に見せ付けたい。お前には素直じゃないんだぜ、って。…結局は、気を引くためのちょっとした恋の駆け引きとかそういうもんになっちゃうんだけど。
コポコポとお湯が入る音、と同時に香ってくる紅茶。この瞬間が一番好き、だなんて。

「はい、熱いから気をつけてね」

「ありがと」

「…ふふ、」

急に笑い出した厩戸を見上げ、睨みつける。おー怖い怖い、なんて両手を挙げ降参のポーズを取りおどける厩戸にちょっとだけムカッと来た。
眉間にたくさん皺を寄せて　なに　と呟くと、厩戸は目を伏せてもう一度笑う。睫毛長いなぁ…本当に女性みたいだ。

「莢にも、それぐらい素直になってあげればいいのに」

「……」

「まあ、そういうところが之乃なんだろうけどね」

パチクリとぎこちないウィンクを落として来た。なんか可愛い。女の私がそう思うんだから、相当なものなんだろう。

だから、敵わない。
昔も今も。なにをどうしたって、あいつの瞳に映ってるのは

「ずっとそうだ…」

「んー？」

「なんでもない」

ずっとずっとずっと、ずっと昔から　好きだったのに

白く塗りつぶせ！（前書き）

※結構きついかもしれないグロ
※「莢↑厩戸」なＢＬ要素あり

白く塗りつぶせ！

日に日に酷くなっているのは分かっていた。
でもそれが之乃の為に、莢の為になるんだったら…止めることはないかなって思ってたんだ。

でも、今回ばかりはそういうわけにはいかない。
ビックリしちゃうよね。仕事から帰ってきたらリビングが真っ赤でさ。まあ、これはいつも通りなんだけど。
よくよく見渡してみたら、首のない死体が転がってるんだもの。さすがに血の気が引いた。

それが莢だって分かった瞬間、笑みが零れたんだけどね。

そこからはやけに落ち着いた感じで、いつも通り之乃の部屋に向かうんだよ。
大方莢の首でも抱いて泣いてるのかなぁ…なんて少しでも思った自分が馬鹿だった。
戸を開いたと同時に香ってくる生臭さ。目に入った、ぐちゃぐちゃの血肉。あーそうだ、この子はそういう子だ。
案の定之乃は血まみれの包丁を片手に血まみれの姿で壁に持たれかかって寝ていた。それはもう満足気な寝顔で。

之乃は『首だけでも愛す』というフランのようなロマンチックさは持ち合わせていないようだった。それもそうだな。
しかしこれは酷い。リビングにあった死体はなんとか原型を保って

いたけど…この死体はただの血肉の塊だ。
月架が人間を貪った後より酷いかも…って、月架のそんなところを見たわけじゃないけど。ていうかこんなこと言ったらフランに殺されるな、うん。

…まあ、そんなこんなでまたいつものようにテルが莢の新しい体を作ってくれている。
もう少しで完成するから、って言われてから彼是一時間近く廊下で待たされてるんだけど。
用意されたイスに座りため息をつく。明日の仕事も朝早いんだけどなぁなんてこれからの予定を考えていると不意に一つの光が廊下を照らした。

「お久しぶりです」

「まだ一日も経ってないから」

「…之乃は？」

「たぶん寝てる」

「そ。ならいいけど」

光とともに現れた莢…なんていったらすんごく神秘的に聞こえるけど、本当にそれぐらいの神秘さは感じても良いんじゃないか。
だってね、あの首なし死体が、ぐちゃぐちゃの血肉の塊が、またこうして普通に笑っているんだから。うんうん、神秘神秘。

「いつもごめんな、テル」

「あ？ああ、別にどうってことないって」

莢の後ろで首に手を当ててダルそうにしているテルに頭を下げる。いつものことだけど、いつものことだからこそちゃんとした礼儀を見せなくちゃね。

「んなことより、はやく帰ってやれよ。之乃ちゃん待ってるんだろ？」

「寝てるってさ」

「あー…まあ、なんだ…うん、帰れ」

「急に命令口調だなお前」

テルからお払いを受けすさすさと家を出る。すっかり暗くなってしまった夜道を、こうやって二人きりで歩いたのは何度目だろう。私は、この時間が一番嫌いだった。頭の奥底、真底で思い出したくない、良く分からないものがよみがえってくるから。なるべく莢を見ないように顔を俯き、それに気付かれないように一歩後ろを歩く。水溜りに映る月が綺麗だった。

「…うまやど、」

「んー？」

「俺、幸せだわ」

「…そう」

急になにかと思えば、惚気ですか。
必ず聞かされるこの言葉。ああ、幸せだなんてね。まあ、莢がそういってくれるのが、私の幸せなんだけど。

首を取られても、四肢を無くしても、両目を抉られても、心臓を潰されても、脳味噌をかき混ぜられても、
それでも莢は幸せだという。これはおかしいことなんだろうか。おかしいことなんだよ。

ねえ、私の気持ちに気付いてなんて言わないから、　お願い

本当の、愛を知って

（私の気持ちは、それからでいいから）

白く塗りつぶせ！ｖｅｒ．アナザー（前書き）

※結構なグロ

白く塗りつぶせ！ｖｅｒ．アナザー

あああああやっちゃったやっちゃったやっちゃったやったやｙｔｙたやｔ

今の心境を文章に表したらこんな感じだろう。

床に転がった首を見て正直引いてしまった。うわーなにこの生ゴミ！きったな！

恐る恐る手に取ってみると、なんか異様な感触がして思わず壁に叩き付けた。やだやだ、本当に汚いわ。

…これ、喋るかな。さすがに死んでるかな。

もしかしたら生きてるかも、なんて思い始めたらもう止まらない。

最終的にはこいつは生きていることになった。よし、殺そう。

頭と同じように転がっていた体を見るのがイヤで、頭だけを持って部屋に行く。なるべく顔は見ないように。

まずは目玉を抉り取る。なんともいえない色をしていたのでそのまま床に放置。

次に鼻。やっぱり汚かったので放置。

次は…髪の毛でも毟っておくか。無駄にさらさらしていたのでテキトウにばら撒く。

次、口の中。舌を切り取り、歯を砕く。わけがわからなくなった。
最後は脳味噌。結構な力を使って頭を上からまっ二つにする。うわあぐろいきもい。
タレ流れてくる脳味噌をぐちゃぐちゃに切り刻む。ついでに全部全部。ぐちゃぐちゃしててうざい。

さて問題です。これはなんでしょう。

「…之乃、」

夢の中で誰かに呼ばれた気がした。あ、違う。いつのまにか寝てたんだ。
目を開けようとしたら誰かに頭を撫ぜられた。厩戸だな。こんな優しい撫で方が出来るのは彼しかいない。
なんか起きるのが勿体無くて狸寝入りを始める。なのに、厩戸はすぐ部屋を出て行ってしまった。　ああ、そうか。

しばらくして玄関から音が聞こえてきて、また一人ぼっちになったんだって確信した。
またっていうか、ずっと一人ぼっちだけどね。なんか三人で一緒み

たいになってるけど、気持ち的にはきっとそうなんだ。
昔から、そうだったから。分かるんだよ、私には！

綺麗に片付けられた部屋を見て、何故か目元が熱くなった。
厩戸には人の傷を治せる能力があったんだけど、なんか知らないうちに部屋を元に戻す能力も身に付けたみたいだった。
なのに、どうしてかな。人の心の傷を癒せるほど、厩戸も万能じゃないみたい。どんなに優しく撫でられても、話を聞いてくれても、なんも、なんもよくならな　いの

なんで、厩戸も、莢も、　なんで、なんで私にやさしく接してくれるの？！そんなのありがた迷惑！！うざいの！やだ、やだやだやだやだやだやだやだやあｙだ

だなんて、今の心境を文章で表すなら、こうだろうね。アハハ　馬鹿みたいに涙が溢れてくるよ。死んじゃえ涙腺

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0718q/

過去≠未来

2011年1月16日06時13分発行